

南岩蔵石不動みなみいはくらいしふどう〔松原通麩屋町の角にあり、真言宗高野山明王院兼帶所なり。本尊不動明王は石像、弘法大師の作なり〕

〔寺記云、当院初は法相宗にて、持統帝の御宇朱雀五年に、道観大徳の草創なり。其頃は此地松栢森々として其中に一堆の丘山あり、平安城開闢の後、弘法大師此石仏をつくりて安置し給ふ。又詔ありて、王城鎮護の為四方に経王を石蔵に収めらる、此所も其一員にして南岩蔵と称す。其後天曆年中、鴨川洪水の時堂舎も没流し荒廢に及びしを、山門の僧苔蘚勅をうけて再興す。それより年累り応仁の乱後大に頽廢し、石像も塵芥の中にあり。天正年中聚楽城造営に奇石を多くあつめらる、これを石狩といふ、其時苔蒸たる奇石なりとて聚楽に入らる。かゝる所夜々光を放ちて城中に怪異多し、故に元の地に返しける。是より後は小堂を営てこゝに安置す、靈驗古今に新なり〕

鉄輪塚かなわづか〔堺町通松原の南にあり。伝云、昔嫉妬深き女あり、神に祈て毎夜丑の時参をなす、氣疲てこゝに死す、其靈を築くといふ。今は人家建続て塚詳ならず〕

大江公資家おほえのきんすけのいへ〔東洞院通五条の北、東側人家の裏に古き高樓あり、是其旧跡なりとぞ。世人謬て深草少将の家なりとし、町の名も今深草町といふ〕

〔袋艸紙云、能因のういんは古曾部こそべより毎年花盛に上洛して、大江公資きんすけが五条東洞院の家に宿す、件の家の南庭に桜樹あり、其花を翫ばん為なりと云云〕

御射山みさやま諏訪社すわのやしろ 〔東洞院通六角の南、御射山町人家の奥にあり。信州しんしゅう諏訪明神を勧請す。鎮坐の年記詳ならず、每

歳七月廿七日祭式を修す〕

住心院ぢゆうしんゐん 〔東洞院通三条の南にあり、天台宗修験道しゆげんだうにして聖護院の院家たり。大僧正澄算ちようさん中興し、それより堂上の華

族入院ありて御嗣職し給ひ、代々勅願所とす〕

本尊毘沙門天ほんぞんびしゃもんてん 〔運慶うんけいの作、立像四尺八寸。中頃大僧正晃諄くわうじゆん一夕の夢に、西の方十里余り歩行し一つの高山に至れば、

松柏しょうぼう蒼鬱そういつとして巍々たる宝閣あり。時に百千の蜈蚣むかで精舎を圍繞し、守護の体に見へける。其中に光明焔々として多門天

現れ給ふ、大僧正ずのき隨喜敬礼して夢さめぬ。奇異なるかな其翌旦、妙法院げうじよ堯恕法親王より金剛院僧正に命じて、此尊像を

附属し給ふ。諄師じゆんし夢中の尊影に違はずとて、拝領して初は摂州本山寺に安置し、尊天告命こうめいによつて当院に遷し奉る。左

に西とり仏師の作りし大日如来、右に弘法大師の作り給ふ愛染明王を脇士とし。近年堂舎再営ありてつねに詣人絶ず〕

ねずみつき ふ どう せん
鼠究不動尊

〔六角堂の西に隣る、住心院に属す。本尊不動尊は弘法大師の作、坐像三尺五寸。脇壇に大日如来を安ず、智証大師の作。又辨天は伝教大師の作〕

だい し だう
大師堂

〔松原因幡堂の内西之坊にあり、密蔵院医王寺と号す、近年堂宇建立ありて堂後西向に額を揚る、秘密蔵と書す、智積院動明僧正の筆なり〕

こう ぼう だい し の だう
弘法大師像

〔真言新義の宗祖興教大師の作、坐像三尺余。旧此尊像は紀州一乗山根来寺の本尊なり。天正十一年兵火の時、かの寺の学頭中性院性盛上人に靈告ありて、当院に遷す。年久しく客殿に安置し、天明元年今の堂内にうつす。

又真言新義中性院伝受の秘密道具、当寺中興性盛上人より伝来して今此寺にあり〕早咲椿〔当寺の庭中にあり。後水

尾院此椿を愛せられ、勅して銘を因幡堂と賜ふ。其節禁裏御口切の生花に用ひられしとぞ〕

いなば だう とい ふ 名 の 椿 を 見 て 其 名 の 五 も じ を 句 の 上 に 置 て

狂歌をよめる

い み じ さ も な が く 八 千 代 も 花 あ れ ど 玉 椿 を ぞ 植 や 置 け ん

湘

夕